

分科会
特別支援学校

第14分科会

福岡県立古賀特別支援学校

研究主題

運動の楽しさを実感し、自ら運動に取り組む、
意欲的な児童生徒を育てる体育授業

福岡県立古賀特別支援学校

1 研究発表の概要

(1) 主題について

今大会の主題を知的障害教育部門の特別支援学校の枠組みで構成してみる。まず、「体育の楽しさを味わわせるため」には、活動そのものの楽しさ(活動欲求の充足)、できる喜び(達成感)、わかる喜び(満足感)、かかわる喜び(仲間意識)の育成が重要と考える。その上で「体育的学力の確かな定着を図るための体育授業」を創造するためには、本校の特徴の一つである小中高一貫教育を有効に活用し、発達段階を踏まえた指導を継続的に行うことで体育的学力の定着を図ることができると考えた。小・中・高等部12年間に運動の楽しさを実感する経験を十分に積むことで、自主的・意欲的に運動に取り組む児童生徒を育成し、生涯にわたって運動に親しむことができる基礎を作りたいと考え、本主題を設定した。

(2) 仮説について

生徒の実態と特性に配慮したアダプテッド・スポーツを活用した指導法を以下の着眼点から具現化すれば、児童生徒は「できる喜び」「わかる喜び」「かかわる喜び」を味わい、さらにそれらをもとに「活用する喜び」を旺盛にすることで自ら運動に取り組む意欲的な児童生徒に育つであろう。

着眼点 確かな「体育的学力」の獲得に向かう環境や運動の選定

着眼点 「運動の楽しさ」と「ねらい」を踏まえた環境構成と教材化

2 公開授業

(1) 小学部5、6年生「マットを使った運動」

授業者 荒木 宏之 他10名

ア 児童が日常生活の中で生かせるような基本的な運動「歩く」「走る」などの動きを基本にして、未分化でやさしい運動から指導を始め、「転がる」「はう」「くぐる」といった運動を取り入れたり、運動の姿勢、方向、回数を変えたりして、多様な動きを体験できるようにする。

イ 「はう」運動をベースにしながら、運動の姿勢、方向を変えたり、「くぐる」「転がる」運動を取り入れていく。1時間の流れとしては、「整列 ラジオ体操 マットでの活動 後片付け 整列」のパターンで繰り返し行い、動きの少ない児童も、基本的な運動を習得することができ、

自己の潜在能力の発現を感じ、動くことに興味・関心を示すようにさせる。また、情緒の安定をもたらし、新しい自己の発見で動きが積極的になり日常生活に変化をもたらし明るく活動することにつなげたい。



(2) 中学部2年生B 「球技」(ロケット風船を投げよう)

授業者 井神 秀展 他6名

ア 周りに人がいる中で自閉症生徒がルールに沿った行動ができるようになることをねらいとして、平成17年度に本校教諭の金森が考案したニュースポーツ「カーナ」を題材とした。「カーナ」の特徴は次の4点である。



安心感がもてる。

細長いビニールの中に風船を詰めたもの(以下、ロケット風船と記す)を使用するので、スピードがあまり出ず、当たっても痛くない。ゲーム内容においても敵味方が入り乱れてボールを取り合うことがない攻守分離型で、お互い自コートの上半分で主に活動するため相手と向かい合うこともなく活動できる。

動きや技術が簡単である。

ロケット風船を拾って、目標物を目掛けて投げる簡単な運動である。

結果が見て分かりやすい。

お互い相手コート上にある目標物(的)を早く全部倒した方が勝ちである。

活動の機会が確保されやすい。

バスケットボールやサッカーなどのゲームで通常使用される用具はボール一つであるためボールに触れる機会は、1ゲームの中でかなり限定される。それに対してカーナは一人に一つのロケット風船が準備されているので活動の機会が確保される。

当初、「カーナ」は自閉症生徒にとって活動しやすいスポーツで、保健体育科の学習で行うことによって自閉症生徒の運動量を確保することを目的に考案されたが、本校で継続して指導してきた結果、自閉症生徒以外にも楽しく、分かりやすく、安全で積極的に取り組むことができることが明らかになってきた。また、個人的スポーツから集団的スポーツへの橋渡しとしての役割も期待できると考えている。

イ 指導にあたっては【A：中央線からロケット風船を投げる B：ロケット風船を拾いに移動する C：ロケット風船を拾う D：中央線まで移動する E：ロケット風船を投げる】という一連の活動を理解させることに重点を置いて行う。

この一連の活動の理解を効果的に進めるために、「活動意欲を高める」「見通しをもたせる」実践的な経験を積ませる」の3つの観点から工夫を行う。

「活動意欲を高める」ために、投げたロケット風船が目標物に当たると音が鳴ったり、倒すとキャラクターが飛び出したりするなどの工夫を行う。また、A～Eの一連の活動ができる度に、パズルを1ピースずつ渡し、数枚で好きなキャラクターの絵が完成するような工夫を行う。しかし、身体活動をスムーズに行うためにパズルなどの手だては早い段階で活用を少なくしていく。

「見通しをもたせる」ための工夫として、先に説明したパズルの完成をもって終わりを意識させたり、ゲーム時間を見て分かるように視覚的に表示したりする。また、活動の始めと終わりには必ず笛を吹くことにより活動時間を明確にする。

「実践的な経験を積ませる」ための工夫として、動きが理解できているパートナーと一緒に活動させるなど、実践的な経験の中で動き方を覚えさせるようにする。また、練習したことを実践に結び付けることができるように毎時間ゲームを行う。

これらの工夫と平行して、周りに人がいる中で活動できるように、練習の際、グループ同士の距離を徐々に近づけたり、一緒に練習する人数を段階的に増やしたりして実際のゲームの人数に近づけ、周りに人がいる状況に慣れさせていく。

3 研究協議

(1) 研究発表1

「生徒が主体的に取り組む体育の授業作り」

～楽しさを共有する野球ゲームの実践をとおして

発表者：福岡県立川崎特別支援学校 教諭 久保 雅子

【補足説明】

- ・攻撃時に生徒が上達してきたのでホームランゾーンを設定した。体育館の上の方まで打つことができたならホームランにした。
- ・守備では、フライを直接捕球することができたら0点にした。



〔質問〕日本学校体育研究連合会東京

守備の生徒がアウトゾーンに入ることでアウトになると思うが、生徒にアウトを認識させるための指導はどうしたのか？

打つことに関しての指導・バットを振る指導はどのようにしたのか？

野球はルールが難しいが、教材として野球を取り上げたのは川崎特別支援学校が中心としてやっているのか、地域の特別支援学校で共同開発したのか、教材の取り上げ方についてどのようにしているのか？

〔答〕

守備でのルール理解が難しい生徒は、最初からアウトゾーンの中に入るように決めていた。今回の対象生徒には、ボールが自分の守備範囲に飛んできて捕球したらアウトゾーンの決められた生徒に渡すようにしていた。(捕ったボールを渡す人をパターン化していた)

ボールは柔らかく当たりやすい物にした。ピッチャーゾーンは、生徒の実態(打者)によって距離を変えていた。生徒たちが上達してきたら通常のピッチャーゾーンに戻していった。ゲームの前には各チームごとに攻守の練習を入れていった。

野球のルールとは違うと思う。野球の特性があるとすればベースボール型ゲームにしていることやバットを使っているところや塁を走っているところになる。また、福岡県にはソフトバンクがある。生徒の中にはユニフォームを着ている生徒もいるため、とても野球には興味関心も高い。通常の野球のルールや道具では難しいため、達成感や喜びを味わわせることができなかった。そのため、実態に応じたルールや道具の工夫を行った。今回の授

業では、川崎特別支援学校独自のものとして取り組んだ。

〔質問〕長崎県

勝負の勝ち負けで生徒はあつくなってくると思うが、内野の生徒が外野へ出てはいけないラインがあるが、そのラインを超えないための手立てはあったのか？

一塁から二塁に走るときに内外野の守備と走塁が錯そうするところがあるのではないかと危険を回避するための例などがあるのか？

〔答〕

体育館で赤いラインを引いている。ラインを越えたときには笛を吹いて注意を促している。得点を減らしている。慣れてくるとチームメイト同士で言葉掛けをしたり、相手チームのミスを審判に訴えたりしている。

攻守の錯そうはある。特に工夫していないので今後の検討課題としたい。

(2) 研究発表2

「体育的学力を身に付け、運動に楽しく取り組む子どもを目指して」

～発達段階に応じた朝の運動の取り組みから～

発表者：福岡県立築城特別支援学校 教諭 黒田 恵美

〔質問〕長崎県

「友達と一緒に活動することで主体的に」とあったが、築城特別支援学校ではリトミックでの主体的な取り組みの評価の仕方はどのようにしているのか？

〔答〕

毎時間評価をすることは難しいが、週に1回程度の評価は行っている。例えばリトミックが終わった後に「つま先走り」を全員の前で見せる時間を確保している。学期の最後にはテスト形式にして全員の前で発表させている。自信がない生徒には、無理に発表させるのではなく教師と一緒に前に出て発表させている。個人ができる喜びや楽しさを感じさせるようにしている。



〔質問〕宮崎県

毎朝20分程度行われているようであるが、体育・日常生活の指導(日生)・生活単元のどの授業で取り組まれているのか。

リトミックは全体で行うことがあるのか、もしくは個別で行うことがあるのか？

体育以外での領域で変化が見られるようになったか？

〔答〕

全校朝の会終了後、日生の時間で取り組んでいる。1時間目の授業に組み込んでいる。最初、中学部は一斉に筋力トレーニングに取り組んでいたが、朝の会の時間等が各クラス様々なので、まず各クラスで筋力トレーニングを終わらせてから走るようにしている。

リトミックは個別指導が難しい。本来は一人の児童に一人の教師がついて指導するのが理想であるが、教師の人数が限られていてできていないのが現状である。クラスによっては自立活動の中で行っていることもある。

対象児は、就学前が一般の保育園で生活していたので自信のなさがある児童であった。緊張感なく取り組めるのがリトミックの良いところなので、その中でコーンを立てたジグ

ザグ走りを何回か挑戦させることでできるようになったり、ハードルを両足で踏み切れるようになったりすることができるようになり意欲的に取り組むようになった。

〔質問〕鹿児島県

「めざせ日本縦断の旅」はどのくらいまで進んでいるのか。

〔答〕

クラス5人の毎日走る周回数をたして札幌まで行くことを目標に1年間掛けてやっている。毎日一人20周以上は走ることができているので、最終的にはぎりぎり達成することができた。日本縦断にしたのは、日本の地図についても知識を広げたかった。総合的な学習の時間などでも各地域の特色等を調べることにもつなげながら学習させたかったため。

〔質問〕和歌山県

中学部では年間を通して15分間走をしているが配慮事項 夏場など

〔答〕

朝の運動は年間を通して行っている。熱中症に関しては、朝の段階で担任が健康観察を行い、健康チェックを行っている。水筒をグラウンドに持って行き、水分補給をしている。慣れない生徒や15分間走ることが難しい生徒には無理をさせず休ませている。帽子は全員かぶらせている。

古賀特別支援学校の公開授業について

〔質問〕栃木県

小学部の授業では、児童がとても落ち着いていて、先生方の連携もとてもよかったと思った。児童の活動時間が40分中に10分しかなかったが、運動量の確保について知りたい。児童が動きをイメージしやすい言葉掛け（専門的な用語を先生たちがつかっていたが）専門的な言葉掛けにしたのは。

〔答〕

運動量は10分ぐらい。まだまだたりないと感じている。筑波大学の斉藤先生からの助言を受け、体育の授業で学んだことを次にどのように生かすかを含めた将来を考えたところでの運動量をとらえていけば、今回の授業をきっかけに家庭でも運動することが好きになることを考えていけばそれも一つの方法ではないかという助言を頂いた。今回の授業を踏まえて次に子供たちに生活の中で体を動かすところを確保していきたいと考えている。運動量や時間の確保の視点を考えれば、短い・少ない点は否めない。その点については今後の課題として検討していきたい。

動きの言葉については、「四つばい」「高ばい」は難しい言葉であると思う。子どものイメージとしては、動物の行動に例えた方が理解が容易であったと考える。今回は言葉のイメージ化までは考えていなかったのが今後の課題としていきたい。

4 指導・助言

筑波大学 准教授 齊藤まゆみ先生

〔福岡県立川崎特別支援学校〕

川崎特別支援学校では、こんな生徒を育てたいということが見える研究発表であった。

人とかかわりの中で運動の楽しさを実感する、このようなことを通して運動を日常生活化し取り組んでいく、そのような生徒を授業の中で育てて行きたいというスタイルが見える発表であった。

学校でやったことをきっかけに家庭でも話題にのぼったり、話したりすることで家庭でも身体活動ができる、共通の話題で関わりがもてるところから日常生活につなげていく視点も含めた面白い取り組みであった。



小規模校の特別支援学校の中で野球に取り組むことは、高いハードルになると思う。その中で少ない人数や実態が違う中で野球に取り組んだことはすばらしい。子供たちができるためのルールや教材を工夫したことで学習指導要領のベースボール型の球技になっていた。交流学習などで、通常の学校とベースボール型の球技としてやっていける新しい教材の内容であった。

ボールを前にとばすための技術指導をより具体的に説明があればよかった。ボールを思ったところに正確に打つ、遠くに打つなど、色々な視点によって指導法やアプローチが違うと思うそれによって用具を使い分ける、言葉掛けの仕方を変える、とんでくるボールにタイミングを合わせて打つことは非常に難しいことではあるが、ティーの様なものを用意し、とまっているボールを打つ、当てる感覚を身につけさせていく。

練習をしてすぐにゲームをすることによって、個々の定着を図っていくトライアルやフィードバックして次の課題設定をしているところが面白かった。今後は、ホームランゾーンの追加やフライアウトの採用など、新しいルールを追加して行くことができ、特別支援学校でも十分に取り組んでいくことができる教材の一つであった。

ベースボール型ではとかくピッチャーとバッター以外はほとんど活動しない、運動量がないというのが通常学校でもある。

しかし「アウトさん」があったことでとにかく全員が動く、何らかの形で生徒が動くので運動量は確保されていた。必ず得点になることで「自分もチームの一員としてやっている」という自己肯定感を高めるためにも有効であった。先生たちが一生懸命やることで生徒もさらに頑張ることができている。

〔福岡県立築城特別支援学校〕

小学部から中学部まで体育的学力の一貫したものであった。学部間の連携は、輪切りになりうまく連携が取れていないことが多いが、軸を置いた発達の視点を取り入れながら体力を高める、非常に面白い実践であった。共通する課題内容、共通する手立て、環境構成というものが見えてくると非常にユニークな築城スタイルという新しい実践の一つのモデルになるのではないか。

朝の20分を学校全体で取り組んでるのは、学校のスタイルとしてすばらしいと感じた。生活リズムを作ることは、子供たちにとっても安定させるために有効である。体力を高めることがキーワードとしてあがっていると思うが、具体的な評価の方法を何で体力を図るかということで、色々なスケールをもつことで研究としてより深まっていくのではないか。

質的变化をどのようにとらえられるかで評価の内容もまた変わってくる。せっかくビデオ撮っているのに、ビデオを元にチェックシートを作成し得点化できるのではないか。自立活動とリンクできる視点は良かった。

失敗事例のなかから新しいものを作ってほしい。考えるきっかけにしてほしい。

変化を図るスケールをもってほしい。できた実感を客観的にはかれる物をいろいろなスケールをもって新しい物を作ってほしい。12年間のつみかさねが大切な物になってくる。

5 まとめ

本研究協議会の助言者から、次の3点 運動の日常生活化 運動量確保をするような環境を支援する工夫 体力的な要素をとらえるための質的な変化(運動有能感も含む)をとらえるスケール(ものさし)を持っておくことの大切さを指導していただいた。以上の3点については、2校の実践発表校のみならず、本県の特別支援学校全体の課題として、その解決に当たっていきたい。

さて、特別支援学校の新しい学習指導要領については幼稚部は、平成22年度から、小学部は、次年度23年度から、中学部は再来年の24年度、高等部においては25年度から学年進行での実施となる。そのため、各校において新学習指導要領の趣旨を十分に理解した上で、今までの年間指導計画の見直しを行われなければならない。今回の研究大会の中で繰り返し言われていたキーワードの一つに、「指導内容の明確化」と「体系化」の2点があげられていた。これを特別支援学校について考えると、「指導内容の明確化」とは各学校、各学部、各学年の子どもたちの実態に応じて、また、学校や地域の実態に応じて単元構成をすることであり、「指導内容の体系化」とは、学部間の連携である。つまり、特別支援学校には幼・小・中・高とあるので、それぞれの学部にて在籍する子どもたちの発達段階等に応じた一貫性を持った教育内容を整理することである。小・中学部設置校の場合9年間、幼・小・中・高があると合計12年間、同じ敷地の学校で一貫教育ができる学習環境にある。そういった地の利を生かした特別支援学校の特質というものが体育科に限らず、他の教科・領域の指導を含め通常の学校に対し、その指導内容の明確化と体系化という情報を発信できるものと考えらる。

文部科学省の佐藤豊教科調査官が学校体育の成果として期待される最終ゴールの一つとして、「生涯にわたる体育実践、生涯にわたる豊かなスポーツライフの継続」をあげられた。これは、障害のある子どもたちが卒業後に地域の中で、一生涯にわたってスポーツを続けることで自らのQOLを高めるという営みであると考えらる。そのためにも、この子どもたちの将来の地域での生活を見通した体育科の指導内容の明確化と体系化を今後もすすめていきたい。

最後に、公開授業の教材「カーナ」は、考案した古賀特別支援学校の金森教諭の「金」をとって「カーナ」になったそうだ。本研究大会がきっかけで、この実践が全国に広がり、できればスペシャルオリンピックの種目になることを願っている。